

研 究 業 績

中野 敏男

I. 著書

1. 『マックス・ウェーバーと現代』 三一書房, 1983, 315 pp.
2. 『近代法システムと批判——ウェーバーからルーマンを超えて』 弘文堂, 1993, 276 pp.
3. 『大塚久雄と丸山眞男 動員、主体、戦争責任』 青土社, 2001, 339 pp.
4. 『오쓰카 히사오와 마루야마 마사오——일본의 총력전 체제와 전후 민주주의 사상』 서민교/정애영 옮김, 삼인, 2005, 321 pp.
(『大塚久雄と丸山眞男 動員、主体、戦争責任』の全訳に韓国語版序文を付したもの)
5. 『詩歌と戦争 白秋と民衆、総力戦への「道」』 NHK ブックス 1191, NHK 出版, 2012, 320 pp.
6. 『マックス・ウェーバーと現代・増補版』 青弓社, 2013, 357 pp.
7. 『大塚久雄と丸山眞男 動員、主体、戦争責任』 (新装版), 青土社, 2014, 351 pp.

II. 編纂書

1. (佐藤康邦・中丘成文と共編) 『叢書エチカ 第四巻 システムと共同性——新しい倫理の問題圏』 昭和堂, 1994, 300 pp.
(主要執筆箇所: 「第一部 3. 社会のシステム化と〈人間〉からの問い」 pp. 74-99, 「第三部 総括討論」 pp. 265-293, 「あとがき」)
2. (岩崎稔・大川正彦・李孝徳と共編) 『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』 青弓社, 2005, 393 pp.
(執筆箇所: 「東アジアで「戦後」を問うこと——植民地主義の連続を把握する問題構成とは」 pp. 12-21.)
3. (メッキネット事務局との共編) 『番組はなぜ改ざんされたか——「NHK・ETV事件」の真相』 一葉社, 2006, 492 pp.
(執筆箇所: 「はじめに——メディアの危機を訴える市民ネットワーク事務局からの提起」 pp. 1-16.)
4. (波平恒男・屋嘉比収・李孝徳と共著) 『沖縄の占領と日本の復興——植民地主義はいかに継続したか』 青弓社, 2006, 366 pp.
(執筆箇所: 「植民地主義概念の新たな定位に向けて——「おわりに」にかえて」 pp. 347-366)
5. (金富子と共編) 『歴史と責任——「慰安婦」問題と1990年代』 青弓社, 2008, 422 pp.
(執筆箇所: 「序章 日本軍「慰安婦」問題と歴史への責任——本書の認識と課題」 pp. 12-32, 「第一章 4 戦後責任と日本人の「主体」」 pp. 82-99.)
6. 『역사와 책임——위안부 문제와 1990년대』 이애숙・오미정역, 선인, 2008.
(『歴史と責任——「慰安婦」問題と1990年代』の韓国語訳)

III. 共著書

1. 藤原保信・三島憲一・木前利秋編 『ハーバーマスと現代』 新評論, 1987, 298 pp.
(担当箇所: 「第8章 合理性への問いと意味への問い——ウェーバーとハーバーマス——」 pp. 208-231.)
2. 城塚登・濱井修編 『ヘーゲル社会思想と現代』 東大出版会, 1989, 465 pp.

- (担当箇所:「第3部 ヘーゲル社会思想と現代 1. ウェーバーとヘーゲル——『団体形成』という問題の行方——」 pp. 293-308.)
3. 日本法社会学会編『法の社会理論と法社会学』(『法社会学』第44号), 有斐閣, 1992, 342 pp.
(担当箇所:「『制度としての法』と討議の手続き——『法化』問題とハーバーマス法——社会理論の可能性」 pp. 49-59.)
 4. 河上倫逸編『ゲルマニスティクの最前線』(『歴史と社会』通巻第14号), リブレポート, 1993, 374 pp.
(担当箇所:「ルーマン法システム理論の規範性の行方」 pp. 334-356.)
 5. 『岩波講座・社会科学の方法 第X巻 社会システムと自己組織性』岩波書店, 1994, 346 pp.
(担当箇所:「4 社会のシステム化と道德の機能変容」 pp. 123-157.)
 6. 『岩波講座・現代思想 第VIII巻 批判理論』岩波書店, 1994, 382 pp.
(担当箇所:「7 対話の理論と合理性の基礎」 pp. 215-247.)
 7. 棚瀬孝雄編『現代の不法行為法——法の理念と生活世界——』有斐閣, 1994, 322 pp.
(担当箇所:「I 法と生活世界 2. システム化社会と責任の再構成——不法行為法の危機をめぐる社会倫理学的考察」 pp. 41-59.)
 8. 酒井直樹、ブレット・ド・バリー、伊豫谷登士翁編『ナショナリティの脱構築』(パルマケイア叢書 5) 柏書房, 1996, 315 pp.
(担当箇所:「第二部 表象としてのナショナリティ 『暗愚な戦争』という記憶の意味——高村光太郎の場合——」 pp. 183-204.)
 9. 『岩波講座・現代社会学16 権力と支配の社会学』岩波書店, 1996, 216 pp.
(担当箇所:「支配の正当性——権力と支配を新たに概念構成する視野から——」 pp. 67-84.)
 10. ホセ・ヨンパルト、三島淑臣、笹倉秀夫編『法の理論 16』成文堂, 1997, 284 pp.
(担当箇所:「法のシステム化と『主体』の責任——法システム理論は何を課題にし、いかにそれを解いているか?——」 pp. 102-124.)
 11. 佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム』恒星社厚生閣, 1997, 434 pp.
(担当箇所:「第三部 ルーマン理論の現在 七 ルーマンにおける法理論の展開とその射程——『コンティンゲンツ処理形式』と『正義』という概念に即して——」 pp. 354-378.)
 12. 小森陽一、酒井直樹ほか編『岩波講座・近代日本の文化史7 総力戦下の知と制度』岩波書店, 2002, 326 pp.
(担当箇所:「総力戦体制と知識人——三木清と帝国の主体形成」 pp. 173-209.)
 13. 『대중 독재——강제와 동의 사이에서』, 임지현/김용우 역, 책세상, 2004, 「일본의 총력전 체제——그 통합과 동원에 내재하는 모순」 (박환무 옮김) pp. 517-530.
(「日本の総力戦体制——その統合と動員に内在する矛盾」(パク・ファンム訳)、イム・ジヒョン、キム・ヨンウ編『大衆独裁——強制と同意の間で』チェックセサン)
 14. 国立歴史民俗博物館編『「韓国併合」100年を問う』岩波書店, 2011, 418 pp.
(担当箇所:「植民地主義の継続を問う視角はあったか」 pp. 334-342.)
 15. 『“전후”의 탄생——일본, 그리고 조선이라는 경계』, 성공회대학교 동아시아연구소 기획, 권혁태 처승기 역음, 그린비, 2013, 「“전후 일본”에 저항하는 전후 사상」(권혁태 옮김), pp.16-81.
(権赫泰・車承棋編『“戦後”の誕生——日本、そして朝鮮という境界』聖公会大学校東アジア研究所, Green Bee, ソウル, 2013.)
(執筆部分「“戦後日本”に抵抗する戦後思想」(権赫泰訳) pp. 16-81.)

IV. 論文

1. 「〈カリスマ〉と〈物象化〉——ウェーバーにおける『支配の正当性』概念の基底——」『倫理学年報』第 35 集, 日本倫理学会編, 1986, pp. 123-139.
2. 討議倫理学と会話的相互行為」『倫理学紀要』第 3 輯, 東京大学文学部倫理学研究室編, 1986, pp. 78-103.
3. 「法への問いと道徳への問い——討議倫理学における問題構成の転換について」『理想』第 637 号, 1987 年冬季号, pp. 37-49.
4. 「法秩序形成の社会学とその批判的潜在力——ウェーバー『法社会学』の問題構成と射程——」『思想』第 767 号, 1988, pp. 86-119.
5. 「理解社会学の綱領的な定礎として」(『理解社会学のカテゴリー』解説) 未来社, 1990, pp.147-193.
6. 「ウェーバー社会学の基本モチーフの解説」(特集 ヴェーバー学の現在 3)『未来』第 326 号, 1993, pp. 2-11.
7. 「近代日本の躰きの石としての『啓蒙』——丸山真男の福沢論における自己背反を顧みて」(特集 丸山真男)『現代思想』1994 年 1 月号 (vol.22-1), 1994, pp. 91-102.
8. 「戦時動員と戦後啓蒙——大塚＝ヴェーバーの 30 年代からの軌跡——」(特集 1930 年代の日本思想)『思想』第 882 号, 1997, pp.159-204.
9. 「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」(特集 市民とは誰か)『現代思想』1999 年 5 月号 (vol.27-5), 1999, pp. 72-93.
10. 「マックス・ヴェーバーの変貌とそれを読む位置」『社会思想史研究』No. 23, 社会思想史学会年報, 1999, pp. 6-14.
11. 「Maruyama Masao between the War-time and the Post-war」1998～2000 年度科学研究費補助金成果報告書 課題名『総力戦体制後の社会とポストコロニアルの文化』(研究代表者 中野敏男), 2001, pp. 131-155.
12. 「〈戦後〉を問うということ——『責任』への問い、『主体』への問い」(特集 戦後東アジアとアメリカの存在)『現代思想』2001 年 7 月臨時増刊号 (vol.29-9), 2001, pp. 291-309.
13. 「普遍主義を語るナショナリズムをローカルな目で見る」(特集 これは戦争か)『現代思想』2001 年 10 月臨時増刊号 (vol.29-13), 2001, pp. 121-131.
14. 「法と倫理——問われる課題、問いの立て方——」『法社会学』第 56 号, 日本法社会学会編, 2002, pp. 1-15.
15. 「自己反省的主体の陥穽」『現代思想』2002 年 6 月号 (vol.30-6), 2002, pp. 17-24.
16. 「東アジアの脱冷戦という文脈で考える——植民地主義と暴力の連鎖を断ち切るために」(総特集 日朝関係)『現代思想』2002 年 11 月臨時増刊号 (vol.30-14), 2002, pp. 130-137.
17. 「どこから出発したのか?——『日本の戦後思想』を読み直す 1」季刊『前夜』創刊号, 2004, pp. 141-151.
18. 「連続する戦時体制の遺産／封印される戦争責任——『日本の戦後思想』を読み直す 2」季刊『前夜』2 号, 2005, pp. 186-196.
19. 「戦後責任を受け止める主体位置——『日本の戦後思想』を読み直す 3」季刊『前夜』3 号, 2005, pp. 180-188.
20. 「戦後思想における丸山真男」『Marxism & Radicalism Review』No. 25, 2005, pp. 2-11.
21. 「自閉してゆく戦後革命路線と在日朝鮮人運動 金斗鎔と日本共産党との間——『日本の戦後思想』を読み直す 4」季刊『前夜』4 号, 2005, pp. 220-229.
22. 「ナショナリズムの解禁と植民地主義の忘却——『日本の戦後思想』を読み直す 5」季刊『前夜』5 号, 2005, pp. 211-222.
23. 「『民族解放革命』と『民族の魂の革命』——『日本の戦後思想』を読み直す 6」季刊『前夜』6 号, 2006, pp. 224-234.

24. 『方法としてのアジア』という陥穽——「日本の戦後思想」を読み直す 7」季刊『前夜』8号, 2006, pp. 208-216.
25. 「植民地主義批判と朝鮮というトポス——『日本の戦後思想』を読み直す 8」季刊『前夜』9号, 2006, pp. 215-223.
26. 「むすびにかえて——『日本の戦後思想』を読み直す 9」季刊『前夜』12号, 2007, pp. 202-203.
27. 「ヴェーバー社会理論のジェンダー論的射程」(総特集 マックス・ヴェーバー)『現代思想』2007年11月臨時増刊号 (vol.35-15), 2007, pp. 61-77.
28. 「総力戦以後に詩を書くことは暴力ではなかったか？」(特集 尹健次『思想体験の交錯』を読む)『情況』2008年12月号, 第三期 vol.9-10, 2008, pp. 111-128.

V. 共同研究の組織

1. 科学研究費国際学研究 研究代表 1995年度～1997年度 研究課題「戦時動員と構造変動」
2. 科学研究費国際学研究 (1999年度からは基盤研究(A)) 研究代表 1998年度～2000年度 研究課題「総力戦体制後の社会とポストコロニアルの文化」
3. 科学研究費基盤研究(A) 研究代表 2003年度～2006年度 研究課題「変容する戦後東アジアの時空間——戦後／冷戦後の文化と社会」

VI. 翻訳

1. (海老原昭夫と共訳) マックス・ウェーバー『理解社会学のカテゴリー』未来社, 1990, 210 pp.
2. (三島憲一・木前利秋と共訳) ユルゲン・ハーバーマス『道徳意識とコミュニケーション行為』岩波書店, 1991, 298 pp. (担当箇所: 第三章 ディスクルス倫理学)
3. ニクラス・ルーマン「法システムの統一性」河上倫逸編『ゲルマニスティクの最前線』(『歴史と社会』通巻第14号), リプロポート, 1993, pp.191-222.

VII. 小論など

1. (論文紹介)「W・ブルッガー『マックス・ウェーバーと近代のエートスとしての人権』」『理想』第620号, 1985, pp. 270-272.
2. 「正義をめぐる〈対話〉と〈会話〉」『創文』第271号, pp. 10-14.
3. 「〈社会認識〉と〈社会批判〉の相互性」『創文』第293号, 1988, pp. 17-21.
4. 「今、批判のポテンシャルはどこに確保されうるのか——三島憲一著『ニーチェとその影』によせて」『未来』第288号, 1990, pp. 18-21.
5. 「ルーマンを、今、どう読むか」『週間読書人』第1870号 (1991. 2. 11)
6. 「書評 折原浩『経済と社会』(現行第五版)「第二部」の論点および参照指示(一覧)」——「一九一一～一三年草稿」再構成のための基礎資料として」比較法史学会編『比較法史研究の課題』未来社, 1992, pp. 208-211.
7. 「カード」川本隆史・須藤訓任・水谷雅彦・鷺田清一編『叢書エチカ2 マイクロ・エシックス』昭和堂, 1993, pp. 26-29.
8. 「物象化——それはどうして『批判』概念たりうるのか」(特集 倫理学の現在)『理想』第652号, 1993, pp. 85-92.
9. 「ウェーバー」(人名項目)今村仁司編『現代思想ピープル 101』新書館, 1994, pp. 30-31.
10. 「『日本』という主題設定者としての丸山真男」『図書新聞』第2310号 (1996. 9. 21)

11. 「鼎談 『日本政治思想史研究』の作為 中野敏男・酒井直樹・成田龍一」『大航海』No.18, 新書館, 1997, pp. 136-157.
12. 「無条件な寛容はありうるのか」佐藤康邦・溝口宏平編『叢書【倫理学のフロンティア】II モラル・アポリア』ナカニシヤ出版, 1998, pp. 104-113.
13. 「たった一度の出会い——追悼・安藤英治」『未来』第 391 号, 1999, pp. 24-25.
14. 「座談会 『戦後』とは何だったのか 中野敏男・高橋哲哉・徐京植・中西新太郎」季刊『前夜』3 号, 2005, pp. 18-60.
15. 「シンポジウム 四酔人経綸問答 経済と倫理 中野敏男・大澤真理・森まゆみ・川本隆史」川本隆史ほか編『岩波 応用倫理学講義 4. 経済』岩波書店, 2005, pp. 243-300.

VIII. 事典など (項目分担執筆)

1. 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』, 弘文堂, 1988. («支配」など執筆項目多数)
2. 大石紀一郎・大貫敦子・木前利秋・高橋順一・三島憲一編『ニーチェ事典』, 弘文堂, 1995.
(「ヴェーバー」、「バラモン」など9項目を執筆)
3. 星野勉・三嶋輝夫・関根清三編『倫理思想辞典』山川出版社, 1997.
(「経済と倫理」、「根拠づけ」、「理想」の3項目を執筆)
4. 廣松渉ほか編『哲学・思想事典』岩波書店, 1998. («官僚制」、「支配」など19項目を執筆)

IX. 書評など

1. 「山之内靖著『社会科学の現在』未来社、1986年」『図書新聞』(1986. 5. 3)
2. 「折原浩著『マックス・ウェーバー基礎研究序説』未来社、1988年」『週刊読書人』第1739号(1988. 6. 27)
3. 「大庭健著『他者とは誰のことか』勁草書房、1989年」『週刊読書人』第1812号(1989. 12. 11)
4. 「内田芳明著『ヴェーバー受容と文化のトポロジー』リブロポート、1990年」『図書新聞』第2017号(1990. 8. 11)
5. 「中村勝己編『マックス・ヴェーバーと日本』みすず書房、1990年」『週刊読書人』第1851号(1990. 9. 24)
6. 「国民国家というフィクションの行方」『茨城大学 教養部報』No. 56(1990. 12. 1)
7. 「河上倫逸編『社会システム論と法の歴史と現在』未来社、1991年」『図書新聞』第2056号(1991. 6. 8)
8. 「高橋洋児著『浮遊する群衆』有斐閣、1991年」『週刊読書人』第1887号(1991. 6. 17)
9. 「金井新二著『ウェーバーの宗教理論』東大出版会、1991年」『週刊ポスト』第1116号(1991. 10. 18)
10. 「柳父圀近著『エートスとクラトス』創文社、1992年」『週刊読書人』第1931号(1992. 4. 27)
11. 「鼎談 丸山真男著『忠誠と反逆』をめぐって 中野敏男・笹倉秀夫・山本哲士」『週刊読書人』第1954号(1992. 10. 12)
12. 「R・マーフィー著『社会的閉鎖の理論』新曜社、1994年」『週刊読書人』第2027号(1994. 3. 25)
13. 「W・J・モムゼンほか編著『マックス・ヴェーバーとその同時代人群像』鈴木広・米沢和彦・嘉目克彦監訳、ミネルヴァ書房、1994年」『週刊読書人』第2055号(1994. 10. 14)
14. 「ポイカート著『ウェーバー 近代の診断』雀部幸隆・小野清美訳、名古屋大学出版会、1994年」『週刊ポスト』第1274号(1995. 1. 27)
15. 「姜尚中著『ふたつの戦後と日本——アジアから問う戦後五〇年』三一書房、1995年12月15日刊」『週刊読書人』第2126号(1996. 3. 15)

16. 「中岡成文著『ハーバーマス コミュニケーション行為』講談社、1996年12月10日刊』『週間読書人』第2173号(1997.2.21)
17. 「M・ウェーバー著『ロシア革命論 I』雀部幸隆・小島定訳、名古屋大学出版会、1997年4月20日刊』『週間読書人』第2194号(1997.7.18)
18. 「西川長夫著『国民国家論の射程』柏書房、1998年4月1日刊』『週間読書人』第2239号(1998.6.12)
19. 「斎藤純一著『公共性』岩波書店、2000年5月19日刊』『週刊読書人』第2345号(2000.7.21)
20. 「徐京植著『秤にかけてはならない 日朝問題を考える座標軸』影書房、2003年9月30日刊』『週刊読書人』第2516号(2003.12.12)
21. 「内田弘著『三木清』御茶の水書房、2004年8月16日刊』『週刊読書人』第2558号(2004.10.15)
22. 「韓洪九著『韓洪九の韓国現代史 II』高崎宗司監訳、平凡社、2005年7月8日刊』『週刊読書人』第2603号(2005.9.9)
23. 「アンドリュー・バーシェイ著『近代日本の社会科学』NTT出版、2007年3月刊』『図書新聞』第2828号(2007.7.7)
24. 「M・ヴェーバー著『ヒンドゥー教と仏教』古在由重訳、大月書店、2009年11月5日刊』『週刊読書人』第2823号(2010.1.29)

X. 学会発表、シンポジウム報告など

1. 「漂流する共同性と規範の『根拠』——規範的問いの相互準拠的ネットワークという視点のために」、日本現象学社会科学会 共同シンポジウム報告、慶応大学、1990.12.16.
2. 「『制度としての法』と討議の手続き——『法化』問題とハーバーマス法——社会理論の可能性」、日本法社会学会学術大会 全体シンポジウム報告、神奈川大学、1991.5.12.
3. 「法、正義、公共性」、ハーバーマス・シンポジウム「正義と法と民主制のディスクルス」報告、比較法制研究所、大阪、1993.3.14.
4. 「ルーマン理論における『法』の問題」、日本社会学会 テーマ部会「ルーマン理論の射程」報告、東洋大学、1993.10.11.
5. 「ポスト・フーコー的理論状況における『権力』概念の探求」、関東社会学会 テーマ部会「権力理論のアクチュアリティ」報告、駒澤大学、1995.6.11.
6. 「Maruyama Masao as the thinker who set the agenda for Postwar Japan」、Workshop: Postwar Japanese Thought and the Legacy of Maruyama Masao, Cornell University, USA, 11 October 1996.
7. 「悪の存立と社会関係の可能性——悪は国家を必要とするのか」、日本倫理学会 共通課題「悪」報告、九州大学、1997.10.19.
8. 「Masao Maruyama im und nach dem Krieg」、Kolloquium: Historikerstreits: Japan und Deutschland im Vergleich Leipzig Universität, Bundesrepublik Deutschland, 21 November 1997.
9. 「マックス・ヴェーバーをめぐって」、社会思想史学会第23回大会 シンポジウム第一部〈グランドセオリーの読み返し・読む機軸のずれ〉、埼玉大学、1998.10.17.
10. 「法と倫理 趣旨説明と問題設定」、日本法社会学会学術大会 全体シンポジウム報告、お茶の水女子大学、2001.5.13.
11. 「グローバリゼーションとナショナリズム／レイシズム」、現象学・社会科学会第19回大会 シンポジウム報告、東京大学（駒場）、2002.12.8.

202 研究業績

12. 「日本における総力戦体制：その研究状況の現在」，強制と同意：大衆独裁の比較研究 国際会議報告，漢陽大学校（ソウル），2003. 10. 26.
13. 「戦後思想はどのように出発したのか・・・戦後神話を越えて」，「女性・戦争・人権」学会 2004 年秋期シンポジウム，東京大学（駒場），2004. 11. 3.
14. 「孫歌著『竹内好という問い』に寄せて」，竹内好一魯迅研究会，北京師範大学（北京），2005. 8. 28.
15. 「竹内好と『アジア主義』という問題」，社会思想史学会第 35 回大会 「戦後思想史再考」セッション，神奈川大学，2010. 10. 24.
16. 「戦後日本の社会科学とスミス・マルクス・ヴェーバー問題」，社会思想史学会第 37 回大会 「戦後思想史再考」セッション，一橋大学，2012. 10. 27.
17. 「近代日本における倫理学の陥穽——戦争責任論と帝国日本の倫理学」，主題別討議「近代日本倫理学の総括ないし反省」，日本倫理学会第 64 回大会，愛媛大学，2013. 10. 5.
18. 「戦後日本経済政策の思想史——有沢広巳の軌跡を手がかりに」，社会思想史学会第 39 回大会 「戦後思想史再考」セッション，明治大学，2014. 10. 26.
19. 「戦争責任から植民地責任へ——日本敗戦後70年に考える歴史への問い」，International Symposium: 'Thinking of Women in the Era of War and Violence'，Seoul，2015. 8. 14.

(NAKANO TOSHIO・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)